

## 李通玄における「信」について

稲 岡 智 賢

はじめに

李通玄は中国華嚴宗の大成者とされる法蔵と同時代に生きたつとも、当時の中央の仏教界に出ることもなく、在家居士として華嚴經に信順した人物である。その為か彼は中国華嚴宗の立場からは傍系として扱われるのであるが、しかしその教義は法蔵に比して、より実践的であるとの先学の指摘を受けている。それでは、この様な評価を受ける彼は、華嚴教學の重要課題でもある「信」をどのように理解したのであるうか。

彼の主著である「新華嚴經論卷十四」には「以果成信 信自己心之是仏分」<sup>①</sup>、「自信自心分別之智 与一切諸仏根本不動智仏 本来是一 以成信心 心外見法 不成信心」<sup>②</sup>と、信を規定する文を見る。即ち彼は信とは仏果によつて初めて成立するものであり、その内容は自心が直ちに仏果に契うものであると信ずる以外には、その成立基盤はないというのである。勿論この文のみでは彼の信に対する見解を総じて知ることはできないけれども、しかし此には彼の信の基本的見解が

よく表われていると思う。それ故、本論文では何故斯く信を規定したのか、その思想基盤を探ることにより、彼における信を研究するについての一段階としたいのである。

### 一

ところで、彼が規定するごとく信がたとえ仏果によつて成立するところのものであるにせよ、信の成立とは自らの分別心が仏と等々と信ずる以外にないとする主張は、決して衆生の増上慢の立場での主張であつてはならないはずである。何故なら、元来自心の分別性と仏智とは相對立するもの、或いはたとえ轉換する可能性は認めるにせよ、これらの二事は常に相反するものとして考えられねばならぬからである。さもなければ仏道修行それ自体が根底から問われねばならない。凡そ相對立するものが、万一同一なるものとして把えられる為には、少なくともその論理的矛盾を解消する為には、両者を成立せしめている基盤への還源が、その最低限度の必要条件となる。その意味よりすれば、彼が分別の性と仏智との両

者をいかに把えたか、その成立基盤を考察することが、上述の疑問を解決する為の糸口となつてくる。

新華嚴経論の冒頭には

夫以有情之本 依智海以為源 含識之流總法身而体

と述べられ、同じく同論卷十四には

此不動智 是一切諸仏一切衆生之地 以此智故作衆生

とも論じており、この二文により前記の論理的矛盾は一応解決するといえる。何故なら此には、衆生と仏との根底には不動智或いは智海がその源としてあり、それによつて仏・衆生が成立するといふからである。勿論、こうした立場は彼独自のものではない。已に法蔵も「衆生界法界無二無別 即此法身以感汚故流轉五道名為衆生」と論じており、又この基盤には心仏衆生三無差別の義を説く華嚴経自体の思想が流れていると考えられるからである。しかしながら、李通玄によつて衆生と仏とが「以迷十二有支 名一切衆生 悟十二有支 是仏」と簡明に定義づけられて衆生と仏との相違を十二有支の迷悟の転換におかれ、次で「故衆生及以有支皆無自性 若随煩惱無明行識名色六根相對 生触受愛取有 成五蘊身 即有生死常流轉故 若以戒定慧觀照方便力 照自身心境体相皆自性空無内外有即衆生心全仏智海」と論じられるのを見る時、彼の立場はその母体が更に溯つて大乘仏教の根本思想たる空思想に基づいていることが頷かれる。それは引き続いて彼が「為

一切衆生 從本已來 無本無末 無始無終 無性無相 無古無今 真智慧之体 是一切衆生之本源也」と論ずるように、衆生の本源を相對を超えた真智慧におき、この相對を超えた真智慧こそ、彼が根本智の無性として把えていることにより裏付けられる。即ち彼は「為智体無性 不能自知是智非智善惡苦樂等法 為智体無性 但随緣現」と根本智の無性を論ずるのであるが、ここには彼における無自性空の立場の徹底があるといえるのではなからうか。彼にとつて分別される智は決して衆生の本源たる根本智ではない。衆生と仏との両者を成立せしめる本源なる根本智は、衆生の分別を絶した無性として把握されるのである。又この義は彼においては更に「為真如理智体皆無性 無性理智 不能自知 若也自知不名無性」と断言せられる程重要な意味を有している。智体無性の故に不能自了という彼の空思想は、智の對象化概念化を許さないのみならず、彼が「但随緣現」と論破するごとく、決して疑ふことのできぬ因縁所生の事実においてのみ、智は感得可能であるとするところまで徹底される。そしてこの随緣現の義は「地」の比喻により更に具体化されることとなる。即ち新華嚴経論卷十四の中で

是故因地随迷 因地随悟 是故如人因地而倒因地而起 正随迷時名之為識 正随悟時名之為智

と論じているのがそうである。人が地によつて倒れそして起

つがごとく、根本智が無性なるが故にそれに迷いそして悟るのであるとの、余りに明解な論理を以て展開される迷悟構造の論述は、我々に仏道修行の必然性の疑念すら抱かせる程である。しかしその疑念も直ちに却下される。即ちそれは知苦縁なる具体的事実を以て論説される時、隨縁現の義も一層明確になり、彼の立場もよりはつきりと理解されることとなるからである。

## 二

彼は迷悟の転換を知苦縁を以て論説する。今その二、三の文を引用してみることとしよう。まず新華嚴經論卷十四の中には

以生死改 衆苦無量 以苦無量方求不苦之道 迷不知苦者不能発心 知苦求真者還是本智 会苦縁故方能知苦 不会苦縁故不能知苦<sup>9</sup>

とあり、又同論二十四には

或因仏菩薩 為説苦因 或自因苦生厭 方求正見不苦之道 若也未厭苦果 終不信聖言 未可自知是真是假是苦是衆 但受其生都無厭患 驚怖熱惱都不覺知 若不深自勤修責躬匡儆作諸定観入法界之眞門者 終未可尽其苦源也<sup>10</sup>

といい、同論二十五の中には

為智体自無性 逐境縁迷故 随迷苦極 自觉迷除 以覚無我智無明即無故 迷我成妄 覚我成智 覺之与迷各無自性 皆從縁而有

李通玄における「信」について（稻岡）

迷悟 為根本智自性無性故 不自了智非智 但隨境起 逐境情生 起於我見非至苦極厭苦求真 若自未厭苦源 設聖者化時不信從<sup>10</sup>

と論じられている。以上三例程挙げてみたのであるが、ここには彼の痛烈なる現実把握が感じとられる。確かに上述の「地」の比喩を以ての迷悟構造の論述にせよ、この知苦縁の論述にせよ、理論的には成程未だ無意義な循環構造を有したのが現実であるとの指摘に止まつたものであり、それを基盤としての根本智の無性の主張でしかないとの批判が残るかもしれない。けれどもその循環構造の中で彼が「以生死故 衆苦無量 以苦無量方求不苦之道」と述べる語を見る時、衆生存在の決して疑うことのできぬこの事実の前には、いかなる戲論も許されぬことが思い知らされる。彼が淡々として「迷不知苦者不能発心」と述べる時、ここには深い衆生存在の悲しみがあるといつても決して過言ではあるまい。彼が「逐境情生 起於我見非至苦極厭苦求真 若自未厭苦果 設聖者化不信從」といい、又「但受得其生都無厭患 驚怖熱惱都不覺知」と衆生の実体を悲嘆とも思われる語を以て示す時、知苦縁に会う難しさや悟りの困難性などが確かに知らされるのである。がしかしそれは衆生をして必ずしも絶望へとは導かない。それどころか却つて根本智の無性の了達的重要性を知らしむるものである。何故ならば、彼のこうした立場には、現に迷える衆生であつても、いずれは悟るべき存在であるとの

信念があるように思われるからである。つまり、衆生自体が分別せる存在なるが故に常に諸法に迷いて存在するのであるが、しかしその迷いは永遠に迷い通せるものではないことを示唆しているのではあるまいか。そしてこの性質が「智体無性 不能自了」と限定されることにより、「縁」自体の重要性が、今「自体の重要性として我々はその確認を余儀なくされてくる。ここに知苦縁を以て論説する彼の実践的立場があると思うのである。

### 三

さて、この様な立場に立脚するが故に、彼にとつては、知苦こそ真を求むる絶好の機会であり発心の基盤となる。苦源を尽すとは、彼において根本智の無性を達観することに外ならない。そしてその根本智こそ「一切衆生之本源」なのである。「以果成信」とは此において唱えられるものであろう。故に又彼においては、この信を得たる時「三界無明一時頓尽」と論じられ初発心時便成正覚の思想へと展開される。しかし彼がたとえ「三界無明一時頓尽」と論じても、その意が仏道修行の完了停止を意味するものでないことは上述より明白であらう。本より彼の著述には「得菩提時無明不滅」「若無煩惱即無教体」等の大胆な語を見る。しかしこの二語は先の「三界無明一時頓尽」の語と決して矛盾するものではない。それは上述の「地」の喩の論理によつても直ちに納得できる。

迷苦は情においてあるのであるが、その情は境を逐うことによつて生ずる。その境こそ彼の「地」の喩の「地」に当る。地が無性なるを達観しておれば自づと生ずる情も性質を異にするからである。一方、又彼は仏道修行の階位について「唯有習氣煩惱 漸々以法治之」と論じているが、それは「三界無明一時頓尽」して後、斯く階位に登るのである。一見矛盾せる表現も彼が説く根本智無性の立場に立脚すれば、それらは一貫して説かれたるものであることが理解できる。こうしてみる時、彼にとつては根本智の無性こそ、彼の「信」の見解を大きく支えているものであるといえる。そしてそれは又換言するならば、彼自身の実践的独自性に富んだ大乘空思想の了達に外ならないと思うのである。

- |    |             |    |                 |    |             |
|----|-------------|----|-----------------|----|-------------|
| 1  | 大正 36・八〇八 a | 2  | 大正 36・八〇八・c     | 3  | 大正 36・七二一・a |
| 4  | 大正 36・八一二・c | 5  | 大正 35・二二七・b     | 6  | 大正 45・七六八・b |
| 7  | 大正 45・七六九・a | 8  | 大正 36・八九六・八一三・a | 9  | 大正 36・八八三・b |
| 10 | 大正 36・七七一・c | 11 | 大正 36・八二七・a     | 12 | 大正 36・七七一・c |

（大谷大学大学院）